



*i am*

Vol. XIX

*Chie Goto*

撮影のため、特別にマスクをはずしています

# 後藤 千絵(ごとう ちえ)

聖隷三方原病院 臨床検査部 臨床検査技師

大学を卒業後、2011年聖隷福祉事業団に入職。聖隷三方原病院臨床検査部配属となり、主に血液検査を担当。2018年係長昇進、1年間の産休・育休を経て、育児短時間勤務を取得。

4月8日生まれ / 出身：愛知県

趣味：フェスやライブでビールを飲むこと

「〇番の方こちらの採血コーナーをお願いします!」  
患者や職員でにぎわう聖隷三方原病院。その地下一階の真つ白で広い空間に、所狭しと並ぶ大きな検査装置。エウン、エウンと音がする。採血管や書類を手にした白衣姿の職員が行き交う分析検査室。「聖隷ラボ」と呼ばれるこの検査部門には、朝から次々と検体が運び込まれる。装置の傍ら、顕微鏡をのぞき込む者がいた。大量の検体を相手に、迅速かつ冷静なジャッジで患者を正しい治療に導く、臨床検査技師、後藤に迫る。

## 冷静な判断で、人の役に立つ

### 臨床検査技師

「資格があつて、人の役に立てるといえば医療の仕事かな...」。  
高校の進路選択時、母親から「資格を取って手に職をつけなさい」とアドバイスを受けた後藤。頭にぱつと浮かんだのは医師、看護師だった。

「でも私の場合、患者さんとの距離が近いと感情移入しちやいそう。そうすると冷静な判断ができない気がする...」。

医療関係の仕事を調べるうち、後藤は臨床検査技師(以下、検査技師)という仕事を初めて知った。

「検査を通じてたくさんのお患者さんに関われるし、検体相手なら客観的に判断ができるそう!縁の下の力持ちってかっこいい!」。  
後藤は検査技師になることを決めた。



専門職として正しい治療に導き

役職者として職場に新しい風を吹き込む

臨床検査技師

自動検査装置では見つけ出せないわずかな異常も、熟練の臨床検査技師は見つけ出せる。

大学で4年間学び、晴れて検査技師として聖隷三方原病院検査部に配属となった後藤。入職初日、技師長は後藤にこう言った。

「あなたはこれから、どこに行ってもスキルが活かせるジュエネラリストか、ひとつのことに極めるスペシャリストを目指すしなさい」。

検査技師として、社会人としてのエールが胸に刺さった。「スペシャリストになってやる！」後藤は心に誓った。



大学の研究室のメンバーと。  
今は皆、総合病院で活躍している。

## スペシャリストを

### 目指して

後藤の担当は血液検査。採血し医師から指示があった項目を検査装置で調べる。

装置が異常値と判定した血液は、検査技師がさらに顕微鏡で確認するのだが、ここに検査技師としての差が出る。熟練した検査技師の目だと、装置で拾えない異常を拾うことができ、検査値をみて「この項目も調べた

方がいいのでは？」と医師に一步踏み込んだ提案もできるのだ。

血液検査はどの診療科でも広く行われる検査だ。アザができたとき整形外科にかかる人。検査技師は客観的にデータを分析し、「意図した診療科とは別要因の症状ではないか？」という可能性を含めて判断する。たまたま血液検査をした患者の異常をいかに見逃さないかが早期治療への鍵となる。後藤の助言により、

整形外科の患者がすぐに血液内科に転科し治療を開始できたこともあった。一方で、後藤が気付くことができず、呼吸器内科の医師自らが血液疾患を疑い、患者を後日血液内科に転科させたこともあった。「私のところでいち早く気づけていれば、もっと早く治療を始められたのに」。スペシャリストは迅速かつ正確に、そして気付くことが要求される。「もっと勉強しなきゃ」。

後藤は毎晩ファミレスに通い、夜中まで勉強しては翌朝出勤する日々を過ごした。5年間の実務経験を積んだ者に受験資格が与えられる認定血



1日に何十人ももの採血を行っても、一人ひとりきちんと向き合うのがポリシー。

液検査技師の資格(※1)もきっちり6年目で合格し、日々の気付きも増えていった。



最新の検査装置が所狭しと並ぶ分析室。臨床検査技師は常に勉強だ。

## 自分も職場も働き方改革

### その1

2018年に第1子を出産した後藤は、時短勤務を利用しての復職となった。勤務時間が1時間短縮された。復職当初は、係長でありながら時短で退社する申し訳なきから、出産前と同様に仕事を受け、自分でその日に全てやろうとした。それが自分にも職場にも最善だと信じていた。

「もう帰らなきゃ！なのに、あれもこれも終わらない！」。急いで保育園に行くと、我が子がポツンと一人陽が陰った教室で待っている。「私は何のために働いているの」。多くの働く親がぶつかる壁に後藤も直面した。

後藤が復職前から参加していた定例会の会議は後藤の復職に合わせて、職場は何も要求せずとも夕方の打合せを日中に変えてくれていた。その時、後藤は感謝と共にはたと気が付いた。「私も働き方を変えればいいんだ」。

以降、後藤でなくてもできる仕事は、できるだけ若手職員に任せられるようにした。後藤がいなくても仕事ができるように下準備をして振り分け、できあがってきた仕事を後藤が確認して、次の過程への指示を出す。抱え込んでいた仕事を手放すと、若手の育成になり、職場の活性化に繋がった。

もちろん今では我が子を待たせることなく保育園へ迎えに行けるようになった。

## 自分も職場も働き方改革

### その2

母親として復職した係長の後藤には、同じく母親として働く職員から働き方の相談を受けるようになった。

必ず定時に帰りたいという希望もあれば、子育て以前と同様な仕事をしたいという希望もある。

制約がある中で、専門職として成長できるように、個々が働きたいと思う働き方をさせてあげたい。そのためには子育て世代以外の職員の協力も不可欠だ。

係長として業務を割り振るうえで、多様な働き方の価値観を認め合う重要性がよくわかった。

「小さい子がいて係長はたいへんじゃない？」と後藤はよく聞かれるそう。もちろん、たいへんなこともある。

それでも係長の仕事にはやりがいを感じている。自分の考えで職場をつくっていきける、やらせてくれる環境。協力してくれるスタッフへの感謝と共に自身も成長できる職場にいることをあらためて実感している。

## 聖隷臨床検査部門流

### 人財育成

聖隷グループの検査技師は病院と健診施設の10施設へ配属される。その数、約300名。施設によって求められるスキルは異なり、施設によって得意分野は異なる。その特性を活かして多様な人材育成が取り組まれている。



2015年頃。「あとは後藤に頼んだよ!」と言葉を残してくれた先輩を囲んで。



皆で助け合い働き方改革を実施。大切な家族との時間をより持てるようになった。

例えば資格取得を支援するワーキンググループ。後藤が持っている「認定血液検査技師」資格は、血液検査に関する知識が優れていると血液検査学会のお墨付きが付くもの。現在、聖隷内での保有者は4名だが、多ければ多いほど、その医療機関の血液検査の質の高さが証明できる。本来なら自宅学習や自施設の有資格者の指導を得て受験するのだが、聖隷ではさらにグループ内部の資格保有者が講師として講習会を開催する。これは資格保有者にも知識を整理してアウトプットする好機となる。それ以外の資格にも同様の取り組みがされている。

もう一つは2018年度から始まった人事交流。病院では多種多様な症例をみられるため、知識が豊富になる。一方で健診施設では、正常か異



臨床検査部門の合同セミナー。聖隷グループ中から検査技師が集まって取り組む。

## 「縁の下の力持ち」が 変化を遂げるとき

かつては検査室で黙々と検体と向き合い、「縁の下の力持ち」と呼ばれていた検査技師。2020年の今、検査装置の発展は目まじしく、装置に任せることは任せて検査室の外に出ていくことが検査技

師かをより短時間で判断する検査のスピードが磨かれる。どちらも検査技師に必要なスキルだ。そこで約1ヵ月間、他施設へ研修に行き、普段とは異なる経験を積めるようにした。他施設で新たな経験をしてスキルアップし、モチベーションの向上を図る。これらの取り組みにより職員の勤続年数が延び、貴重な「人財」の維持にもなっている。



元気の源は家族とフェスとビール!

検査技師として高いモチベーションをもち続けている後藤。その秘訣は何か。  
「秘訣?大好きなビール片手に、娘と夫とフェスで盛りあがること!」と満面の笑みで即答してくれた。

師には求められると後藤は考える。あまり知られていないが、検査技師は検査室以外にも活躍の場が多くある職種だ。  
例えば、病棟で看護師がする採血は検査技師が担うことができ、そうすれば看護師はもっと患者をみられる。より安心で安全な医療を提供するために、「検査室の外でも力持ち」として、検査技師は変化を遂げる時がきている。  
「ジェネラリストかスペシャリストになりなさい」。技師長は今もこの言葉を繰り返す。血液検査のスペシャリストとなった後藤は、分析検査室のジェネラリストを指している。進化をした後藤がスペシャリストでジェネラリストとして活躍する日も近いかもしれない。



取材：法人本部 秘書・広報課 池田・松林

※1 認定血液検査技師  
血液検査分野における高度な知識や技術を有する臨床検査技師の育成を図り、より良質な医療を国民に提供することを目的として日本検査血液学会が認定をする認定資格。



メンバーに支えられながら、検査技師として、係長として、母親として成長する。

*i am ...*

1都8県で事業を展開する聖隷福祉事業団。現在、15,000人以上（※）もの職員がそれぞれの施設で日々業務に取り組んでいます。本誌では聖隷の「ヒト」、聖隷で活躍する「モノ」、聖隷で行われる「コト」へピンポイントに焦点を当てます。

利用者さんが住み慣れた地域で暮らし続けることができますように——  
女性職員のみで構成された秘書・広報課編集チームが、一際輝く「わたし」の魅力、そして聖隷福祉事業団の魅力をご紹介します。（※）2020年3月現在

企画・編集・発行：法人本部 総合企画室 秘書・広報課



社会福祉法人  
聖隷福祉事業団